# April Fool

---

　その日は、桂の話し声で目が覚めた。

　耳触りのいい甘い声でふわりと眠りから引き戻され、ゆっくりと、自然に意識が覚醒していく。目覚まし時計で無理やり起こされる朝とは違う、心地よい目覚めだった。

　あれ。……桂、昨夜うちに泊まったんだっけ。

　そんなことをぼんやりと思いながら、修史は目を開けた。
　ちょうど視線の先に、桂の背中が見える。桂はベッドから身を起こし、自分の携帯で、どこかに電話をかけているようだった。

「うん。……いや、そうじゃなくて。……瀧川がね」

　そう言いながら、桂は修史が起きたことに気づいて振り返り、かすかに微笑んだ。枕の上に肘をつき、修史はまだ覚めきらない意識のまま、その会話を聞いていた。

「ひどい風邪ひいて、寝込んでるらしいから。……見に行ってくれる？　……俺、都合つかないし。……部屋で死んでたら困るから」

　回線の向こうから、電話の相手が何かを言っているのが、修史の耳にも聞こえた。だが桂はそれに構わず、じゃあよろしく、とだけ言ってそのまま強引に通話を切った。

「……瀧川が、風邪？」

　珍しいこともあるな、と修史が起き上がりながら言うと、携帯をベッドサイドに置いた桂は、クス、と小さく笑った。

　その意味深な笑顔に、修史は沈黙する。何となく壁のカレンダーを見やり、さっきの

会話を思い返して……ようやく、桂が誰と電話していたのかを悟った。

「……おまえって、瀧川ハメるとき、異様に楽しそうだよな」

　呆れたように修史が言うと、桂は肩をすくめた。